



●●●● 少女雑誌の部屋から ●●●●

今月号は、今年で生誕 120 年を迎えた松本かつぢを特集いたします！前回、VOL.31(2022 年 10 月発行)でも取り上げましたが、少しでも内容を変えてお届けします。少女雑誌の部屋公式 X(旧 Twitter)でも時折かつぢの作品や情報をお伝えすることがあるのですが、他の投稿と比べると反響が大きく、その都度かつぢの根強い人気ぶりを感じずにはられません。あらためてその魅力に迫ります！

松本かつぢ

Matsumoto Katsuji

1904-1986

神戸市生まれ。本名は勝治。

立教中学中退、川端画学校でデッサンを学ぶ。中学在学中から家計を助けるために雑誌の挿絵を描くアルバイトを始める。昭和初期に少女雑誌の挿絵画家としてデビュー。エキゾチックで華麗な抒情画とコミカルタッチの絵を同時に描き分け、人気を博した。

昭和 13 (1938) 年、『少女の友』にて漫画「くるくるクルミちゃん」の連載を開始。戦後、掲載先を『少女』(光文社)に変えながら、35 年間にわたって掲載された。

50 歳を機に少女雑誌の仕事から引退し、童画の仕事やベビーグッズの企画・制作等、幅広い分野で活躍した。

抒情画家に憧れて

新聞社に勤めながら並行してアルバイトでカットや挿絵を描いていたかつぢに転機が訪れます。妹が愛読していた『少女界』に掲載された落谷虹児の渡仏送別記事の中で、大勢のファンに見送られながら横浜からパリへと向かう晴れがましい虹児の姿に目が釘付けになったのです。その時、「自分も抒情画家になる」との決心を新たにしました。(その後、末の妹・龍子は落谷虹児の妻になりました)

かつぢと漫画

『少女の友』昭和 9 年 4 月号の付録「? (なぞ) のクローバー」はかつぢが手掛けた長編漫画物語です。本編は 12 ページのカラー刷りで、覆面をつけたヒロインが大活躍します。昭和初期に書かれたものとは思えないほどに構図やコマ割りが優れており、少女まんが史研究者の間でも注目されている作品のひとつなのだそうです。

淳一とかつぢ

昭和 10 年代、女学生たちの間では中原淳一と松本かつぢの描く抒情画がブームで、人気を二分していました。どちらのファンであるかによって性格や好みが変わったそうです。淳一は『少女の友』の看板画家として活躍していましたが、昭和 15 年、軍部の圧力によって 6 月号の表紙を最後に降板。その後、淳一に代わって編集部の柱となり、誌面を守ったのがかつぢでした。

元祖はクルミちゃん

連載漫画「くるくるクルミちゃん」は少女漫画の先駆け的作品となりました。主人公のクルミちゃんは、少女たちの間で愛すべきキャラクターとして定着していきます。雑誌本誌やふろくだけにとどまらず、次々とグッズ化されて女の子向けキャラクターの元祖となりました。偽物まで出回るほどの人気ぶりだったようです。



©松本かつぢ